

「刺し子」によるモダンからの脱却

蘆田 裕史
京都精華大学専任講師



zaziqo 2017年春夏コレクションより。撮影・吉川周作

近代ファッションの歴史は大量生産、大量消費とともにあり、その速度は増すばかりである。そこに「手芸」をもちこむことは、新しい風を吹き込むことになるのだろうか。

zaziqo (ザジコ) というファッションブランドがある。カラフルな色彩とポップな柄が特徴的な zaziqo の服は、一見するときわめて現代的にも見えるが、そこには並大抵でない量の手仕事が含まれている。デザイナーの清水えり子が一針一針手でステッチを入れ、デザイナー自身はそれを「刺し子」とよんでいる——、あえて手仕事の痕跡を残す意味はどこにあるのだろうか。

より多く、より安く

近代以降のファッションの歴史は、量産化と価格の引き下げを推し進めるものとして考えることができる。一九世紀前半までは顧客と仕立屋が相談しながら服を作るのが一般的だったが、一八五八年に自身のブランドを設立したイギリス人ファッションデザイナーのチャールズ・フレデリック・

ワースがオートクチュールのシステムを考案したといわれる。それは、デザイナーが先にサンプルを作り、顧客に提示し、注文をとるといったものであった(ついでにいえば、そのときに生きた人間に服を着せて歩かせるファッションショーも考案された)。そうしてシーズン毎に新作を発表するコレクションというシステムも生まれることになる。

毎シーズン新しい流行が作られることは、流行のサイクルが加速されることにつながる。すると、社会学者のゲオルク・ジンメルが指摘するように、より安価なものが求められるようになる。というのも、上流階級に属するものでさえ、商品が安価でなければ次々に流行を変えることができなくなるためである。そう考えるならば、戦後ほどなくしてオートクチュールがプレタポル

テに取って代わられるのも首肯できるだろう。オートクチュールからプレタポルテへの移行は、単に仕立て服が既製服になったというよりもむしろ、量産化による価格の引き下げがその特質だと考えられる。

一度転がり始めた石はなかなか止まることがない。今度はプレタポルテのなかでもセカンドラインやディフュージョンラインとよばれる、同じブランドの「より安い」ラインが作られることになり、さらにはファストファッションが隆盛するのも当然だろう。



zazi 2015年秋冬コレクションより。撮影・Rie Amano、モデル・さくちゆみこ

う。現在のファッション業界の状況は、ワースがオートクチュールを生み出したときに既に宿命づけられていたのだといえる。

新しさを求める近代ファッション

コレクションというシステムは常に新しさを求める。いってみればそれはモダニズムに囚われた価値観である。詩人のシャルル・ボードレーはモダニティ、つまりいまこの新しさを肯定したが、「今」はすぐに過ぎ去り過去となるため、新しさが永遠に続くことはない。つまり、常に新しさを求めるファッションの世界は今なおモダンの世界を生きているといえる。そこから脱却するにはどうすれば良いのか。そのひとつとして、先に述べた「量産化と価格の引き下げ」に抗うことが考えられるだろう。

一方で、ファッションの歴史はファッションの民主化と見ることもできる。安価な商品の供給によって、大衆がおしゃれを楽しむ

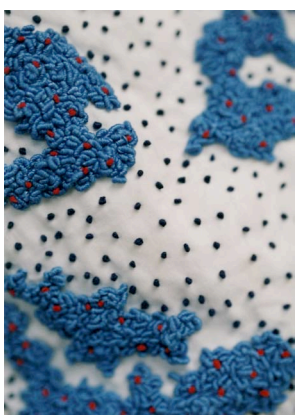
むことができるようになったのも事実である。量産化と価格の引き下げに安易に反対したところで、その民主化に逆行してしまうことになる。

モダンからの脱却

zaziqo の清水が服に施す刺し子は、本来の刺し子のように実用的な意味があるわけではない。あるいは、近年よくいわれるような手仕事の温かみを感じるようなものでもない。しばしばアイテムの全面に刺し子を施す清水の行為は、むしろ何かに取り憑かれたかのような様相をもつ。彼女が対峙しているのは近代ファッションの歴史そのものであり、針と糸でそれを乗り越えようとしているのである。手仕事による制作は、一見プレモダンへの回帰に見えるかもしれないが、そこにこそファッションがモダンから脱却する可能性があるのかもしれない。



zazi 2015年秋冬コレクションより。zaziqoは2016年秋冬コレクションまではzaziのブランド名で活動をおこなっていた。撮影・Rie Amano、モデル・さくちゆみこ



zaziqo 2017年春夏コレクションより。撮影・吉川周作